

## 【第1分科会】

演題：「大人が変われば、とめられる ～『いじめ』を正しく理解する～」

講師： 八ッ塚 一郎 氏（熊本大学教育学部 准教授）

八ッ塚でございます。本日はお忙しい中、休日で色々な行事もある所お越しいただき、ありがとうございます。今日の話の内容ですが、3つくらい、かいつまんでポイントをお話ししようと思います。

### 1：「いじめを正しく理解する」

いじめについての正しい理解がされていない、間違っているという言い過ぎですが、間違いに近いくらいに十分ではない理解が広がっている、そのことが大きな問題です。子どもたちが悩んでいる『いじめ』というのが実際どういうもので、ふだん我々大人が思っているものとどう違っているかを確認する必要があると思います。これについて、まず正しい理解、こういう誤解をしがちだということを考えてみたいと思います。



### 2：「とめられる・・・」

人間が集まっておれば色々な形でトラブルは発生しますし、問題はむしろ頻繁に生じるものです。この問題の小さなときに芽を摘み対応する中で社会を作ってきたわけですが、それを今止めることができている。実は止めるチャンスというのが沢山あって、いくらでも手がかりがあったはずなのに止められていない、だから止めなきゃ、ということを2つ目に考えていこうと思います。

### 3：「大人が変われば」

子どもというのは日々色々な形で、大人の様子、親の様子、先生の様子、言動を気にかけて見ているわけです。ちょっとでも「これは今までと違うぞ」「何か先生がちょっと違うぞ」「うまく言えないけど違うみたいだ」ということに気がつくとき大きく状況が変わっていくと思います。ですから、今日は「大人が変われば」というところをお話ししようと思います。

#### 1「正しい理解」

#### 2「止められない現状」

3「大人がどう変わればいいのか」、以上の3点を、本日はお話できればと思います。

### 1：の正しく理解する、という所から入りたいと思います。

連日のようにいじめという言葉を目にするし、テレビをつけたらそんなドラマをやっていたり、ニュースが流れていたりします。私たち自身も子ども時代を過ごしているわけで、子どもの頃に身近にいたり噂を聞いたり耳にして馴染みがある。ですから、私たちは分かったつもりになっているということが、実は一番謎だったということなんです。

いじめについて、どのようなものを連想なさいますか？「いじめっ子」とか「いじめられっ子」という言葉がありますし、いじめっ子というのは何かこう、凶暴というか乱暴というか、ひどいことをする子がいるんだと。一方でいじめられそうな子は、見るからに心配そうな、見るからにひ弱そうな感じの子。こういうイメージをする場合が多いのではないかと思います。一番分かりやすく言えば「ドラえもん」の世界ですね。定番のように、「ジャイアン」という体格のよい、温厚とは言いがたい荒々しい感じ



の子が、主人公である「のび太君」のような、いかにも全体的に弱い感じの、あるいは頼りなさそうな感じの子を捕まえる図。だから、教室でちょっと生活態度が乱れていて身体が大きく乱暴そうな子は、ちょっと警戒しながら様子をみよう、逆にいかにもテンポが遅い弱そうな子については、何か起こらないか心配しようという、そういうイメージというものが、残念ながらまだまだ一般的には広がっていると思われます。

しかし、こうした捉え方は現代のいじめ研究の最前線では、完全に否定された見解です。このことだけでも確認していただけるなら、今日の目的の粗方は達成したと言えるかもしれないと思います。

「特定の子だけの問題で普通一般の子は関係ない」という見方が、今は過去のものになっているということを、最初に申し上げておきたいと思います。

実はこれ自体、新しい最新の知識というわけではありません。

1990年代の段階ですでに、当時の文部大臣が「深刻ないじめはどんな学校でも、どんなクラスでも、どの子どもにも起こるから気をつけなさい」と通達を出しています。どんな学校にも、どのクラスにも、どの子どもにもいじめは起こり得るということ、これを20年近く前に、文部科学行政のトップが通達を出しています。『いじめはどこでも必ず起きる』、むしろ『いじめなど起きそうにない所で起きる』。そのことを大きな出発点として根本的な認識として設定する必要があります。

そう言っても、「それは新手のお説教じゃないか」「やっぱりいじめは凶暴そうな子がいて、弱い子がいて起きるんじゃないか」「普通の子は関係ないだろう」と思われる方が大勢いらっしゃるだろうと思います。

2011年（平成23年）10月、滋賀県大津市の中学生が、学校での深刻ないじめを苦にして自ら死を選んだ事件がありました。教育界にとって大きな衝撃となりましたが、学校も市教委も専ら『家庭に問題があったから死を選んだんだ』という虚偽まで流して隠蔽を謀ったということで、むしろそれが大きく深刻な問題になり、激しく批判されたということがありました。

報道を見ると、加害者というのは特定の滅多にいない凶悪な子で、被害者は虚弱な子という印象に見えてしまいます。しかし、第三者調査委員会の報告はじめ様々な資料で経緯を見てみますと、実際には被害者も決して「のび太君」みたいな虚弱な子ではなかった。むしろ最初の段階では加害者も被害者も同じくらいの体格で、どちらが強いとかどちらが学力が高いとかもなく、似たような子ども同士だった。しかも、その2人は最初の段階ではとても仲がよかったし、周りからもそう見られていたということでした。こういったことは、この大津市の事件に限らず、最近あった事件の中でも、実際には周りからは仲がよく思われている、いつも一緒にいた関係の中でいじめが発生したということが、あまりにも多く報道されています。

仲のよい子同士の間で、いきなり被害者の自死に至るような深刻なことが発生するわけではありません。実際にはもっと軽微な現象で、それこそいじめという言葉を使うかどうか迷うくらいの微細な、小さな現象から発生します。

国立教育政策研究所という国立のいじめ問題を研究している機関の発表などによりますと、非常に小さなレベルでのいじめ、ちょっかいを出すとか、悪口を言うとか、突っかかるというタイプのいじめというものが、荒れているとは言えない普通の学校でもクラスの違いを問わず半分以上の割合で発生しており、むしろ経験する方が一般的というのが現在のいじめ研究、いじめ指導の大前提、共通認識になっています。

もちろん、ここにはレベルの差があります。非常に小さなレベルのいじめというものは、多くの場合1～2週間で終わってしまう。言ってみれば風邪のようなもので、ちょっとした一瞬のここのように起こ

ってなくなってしまう。ところが、期間が短い分、まさに風邪のように至る所に、治ったかと思えば違う所にうつるというように、次々と出て参ります。しかし、1～2週間もするとそれが治まって、今度は別の子がターゲットになってしまい、またいじめが起きる。子ども自身の言葉を借りると「ババ抜きみたい」と言われるのが現代のいじめの大きな特徴なんだというわけです。そういった小さいいじめの種のようなものが悪化し、重症化していく。

このように現代のいじめというのは、私たちが普段思いがちな、特定の要注意な子がいて、あるいは要注意のいじめられそうな弱い子がいて発生するというものではなくなっている。風邪のように誰でもかかる可能性がある。それがいつの間にか重症化していくという形で進んでいく、そういうものによっていつの間にか変わっているということ、まず最初にご理解いただく必要があります。これが一番最初の正しく理解するという所です。

根本的にドラえもん「ジャイアン」と「のび太」というイメージを捨てていただく必要がある。むしろ「ジャイアン」でも「のび太」でもなく、「スネ夫」であつたり「出木杉君」であつたり、他の一杯いるような子の間でも発生しているのが現代のいじめです。

数年前まで中学生だった若い人に聞くと、確かにそうだと思います。あまりにもアツという間だったり、その後の学生生活をする中で忘れていたが、実際に体験したり身近で見たという子がたくさんいます。しかし、ついつい人間そういうことは忘れますし、深刻なものに目を奪われてしまって、実際に子どもの世界で起きていることについて目が届かなくなってしまう、気が及ばなくなってしまうということがある訳です。

2：どうしてそれが止められなくなってしまうのか、という話です。

あちこちで小さな芽が発生して、それが深刻になっていくのはどうしてかという問題です。深刻な事態になる時には必ず以下のような特徴があります。それは、遊びという限度を越えて何かしつこい。粘着的というか、なぜここまで繰り返すのか分からない、本人たちもよく分かっていなくて、執拗に悪口を言い続ける、そしてそれを続けてしまう。あるいは、執拗にものを隠すということを繰り返す。あるいは誰かの持ち物を勝手に取ってしまうとか、隠してしまう。本来だったら十分犯罪ですが、持ち物を損壊するとか人の所有物を勝手に使ってしまうとか、そういうことが平然と当たり前に行われる。しかも被害を受けている方もそのことに腹を立てたりしない。当たり前のように受け入れてしまうという、執拗さや所有権の混乱ですとか、被害者そのものが麻痺してしまったような、そんな兆候が見られるわけです。なぜそんな具合に深刻化していくのか、なぜ止められないのか、そのことについて少し考えてみたいと思います。

最初の小さな段階だったら止められるのに、それが止められないのは何故かということですが、それについては残念ですが「大人の責任」というものがきわめて大きいということを認めざるを得ません。そしてまた、多くの先生方がいらっしゃる中、私自身教育関係者のはしくれとして心苦しいというか認め難いことですが、教師の責任というものが大きい。そのことをまずは考えていただく必要があります。

先ほどから例として挙げております滋賀県大津市の事件の中でも、子どもたちは比較的成績のよい子が多く、当初は落ち着いた感じで動いていたと報告されています。担任の先生は決して悪い先生というわけではありません。しかしながら毅然と対応するということが得意ではない方だと、むしろ温厚で子どものことはよく見ているけれども、ビシッと自分を切り替えて厳しく子どもに接するということが、あまり目立たない、得意ではない、そういう方だったということが、複数の資料では書かれております。

加害者と被害者もよくプロレスごっこをして遊んでいましたが、このプロレスごっこのようなものが2学期になるとクラス全体に広がっていき、休み時間も廊下で取っ組み合っているような子どもたちが

複数いて、しかもそのことを誰も注意したりしない。また授業時間中に先生の許可なく立ち歩くような子どもが出たり、先生の授業中に紙飛行機を作って飛ばすような子が複数見られるという具合に、急激にクラスの状態が悪化していったということです。

しかし、先生だけを責めるということも酷であろうと思います。現代の学校の先生方のお忙しさ、それは言うまでもないことだろうと思います。子どもの成績にしても、かつてのノンビリとした時代とは違って、いろんなことを要求され、先生が普段抱えている仕事も多く、常に目を配るということがなかなかできにくいという背景ももちろんあります。また、当初はうまくいっていても、クラス、学校、地域特有の問題、進学を意識するような背景や受験というものですとか、いろんなものが作用・副作用をしたらろうと思います。心理学では特にこれが原因だというのは言えないわけですが、先生自身も残念ながら自分で抱え込んでしまって、本当は必要な、他の先生の助力を得るとか、自分ではできなくても他の先生に代わって指導してもらったり、厳しい所を見せるなど、自分のクラスの現状を主任や他の人と共有するということが十分にしていなかった。それによってクラスの雰囲気が悪化していったのだと考えます。

3：どうすれば止められるのか、という結論の話に入りたいと思います。

残念ながら現代は、親の中にもいじめを正当化するような、いじめを受け入れるような考えを持っておられる方がいらっしゃいます。現在のいじめ研究の中の『禁句』といわれるものがいくつかあるんですが、そのうちの2つを取り上げてご紹介します。

まず1つ目、

【でもいじめられる側にも悪い所があるよね】

私たちはついつい、いじめられる方にも原因があるんじゃないかと思ってしまいがちがあります。「のび太君」みたいに弱々しいから手を出したくなるんじゃないかとか、生活習慣ができてなくて不潔な感じがするから皆が悪口を言いたがるとか、本人自身が自分勝手なことばかりするから周りの皆が無視するとかです。多くの事件の中で子どもを失った親御さんがおっしゃっていたんですが、「いじめられるお前にも悪い所があったんじゃないか」、「お前が自慢をするとかクラスで目立つようなことをするからいじめられたんじゃないか。」ということを言ってしまったと後悔されています。

これは重大な禁句であり、いじめを深刻化させる非常に危険なバッドワードだと言わざるを得ません。つまり、いじめられる方も悪い、と言ってしまうことによって、結局私たちは「じゃ、いじめていいんだ」「悪い所があったら、いじめちゃっていいんだ」というメッセージを子どもに発してしまうことになるのです。

確かに癪に障る人というのは人間だから必ずいるわけです。自分勝手なことを言う子とか、身なりが不潔な子とか、ピントはずれなことを言う子が必ずいる。だからといって、そういう子に寄ってたかって悪口を言ってもいいのか、公然とその子の物を取り上げてしまってもいいのか、その子に暴力を振るってしまってもいいのかというと、そんなことはありません。悪い所があるなら、何故そのことが悪いのか、どうやったら直せるかを、みんなで協力しながら、クラスを改善していく方向に議論をもっていくことが本当の教育なんでしょうが、残念ながら、いやな奴はいじめていいんだという雰囲気が広がってしまっています。また、そういう言葉を平然と口にしてしまうということがあります。

それから2つ目の禁句、

【いじめられるよりも、いじめる方に回りなさい】

最初に言いましたが、現代のいじめでは特定のいじめっ子やいじめられっ子はいません。自分はいじめる側に回ろうと思っても、いじめの対象になるという逆転現象というものが頻繁に発生します。嫌な言い方になりますが、「いじめる側に回りなさい」と子どもに言うことは、結果的には子どもを被害者にしてしまう可能性が高く、子どもをいじめに巻き込んでしまうことになります。

多くの場合、いじめの芽はクラス全体であったり、親だったり、生徒指導や主任、校長先生を巻き込んだ形で歯止めがかかったりするわけです。そういうストッパーにあたるものが本当はたくさん学校には用意されているはずなのに、そういう安全装置が全て効かなかった場合に深刻な事件が起きてしまいます。必ず止めるチャンスがあったのに、止められさえすれば最悪の事態は避けることができたのに、止められなかった。そんな事件が私たちの周りで、テレビや新聞で報道されているわけです。

大人自身が普段からいじめを認めるようなことを言わず、

- ・それはやはり深刻なことだ
- ・何かあったらお互いに共有しなきゃいけない

という雰囲気を作り、どんなことがあってもいじめを認めたり、いじめる側に回るのはではなく、親には言いにくくても学校で言いやすい人に言わなきゃいけない。先生には言いにくくても、保健室の先生には言わなきゃいけない。あるいは電話相談ダイヤルや何かほのめかす形でもメモでもいいから、そういうのは皆で考えることだ、という雰囲気を作っておく。親自身がいじめについての認識を変えることが、実はいじめを止める、起こさないための一番最初の、一番簡単な、そして一番強い方法であります。

本日のこの研究大会のメインテーマは「見守り・育てる 今できること」です。見守りということは、見て見ぬ振りをするということではないはずです。育てるというのは、甘やかすということではないでしょう。子どもを尊重し対等に扱う、そのことしか答えはないだろうと思います。子どもを見守り、育て、対等に扱って大人にする。そのために何が必要か？親自身が果たしてこれで足りているだろうか、と見直すことです。

例えば十分子どもに時間を取っていただろうか、子どもを守るための温かい場所、温かい食べ物、温かい寝床、最低限それを子どもに提供できていただろうかということを振り返ること、そして子どもを対等に扱うということです。子どもだって大人と同じで、辛いことは言いたくないかもしれない。本当は親に聞いてほしいけど、先生に告げ口されたりしたくない。学校に怒鳴り込まれたくない、公言して欲しくない、と思っているかもしれません。子ども扱いして頭ごなしに上から目線で解決しようとせず、まず子どもにどうして欲しいかを聞いてあげることです。

子どもは案外大人の色々な所を、小さな所を見えています。別に急に取ってつけたようなことをしなくてもいいんです。何かちょっと違うな、何かいつもと違うな、何か自分のこと見てくれてるんだな、何か心配してくれてるんだな、自分の気持ちを尊重してくれているんだな、という気持ちになるような時間を、1日の間にほんの少しの間でも、1週間の間にわずかな日にちでも取ることができれば、それが小さいいじめの種というものを潰して、深刻な問題を起こさない子どもを育てるための手がかりになる、そのことを最後に大人が変わるの意味合いとして提案しました。



以上大きく3つの話について本日話をして参りました。短い時間の中で決して十分ではなかったかもしれませんが、いじめ研究の最前線の常識ということを改めて確認していただければ幸いです。

ご清聴、ありがとうございました。